週間ダイヤモンド　今週の一冊

北村行伸

平成 12 年 3 月11日号

「バルザック「人間喜劇」セレクション　第7巻　金融小説名篇集」

オノレ・ド・バルザック（著）
鹿島茂、山田登世子、大矢タカヤス（責任編集）
吉田典子、宮下史朗（訳）
藤原書店　1999年11月30日刊

フランスの文豪バルザックは1799年生まれで、昨年は生誕200年ということでバルザックに関する様々な書物が出版された。本書もその一冊である。この「バルザック『人間喜劇』セレクション」の仕掛人であるフランス文学者の鹿島茂氏は「いま、なぜバルザックか」という問いに答えて、「日本が「貧困と禁欲」の社会から、「贅沢と欲望」の社会に移行した現在だからこそバルザックを理解できる状況が生まれたと訴えたかったことです。刻苦勉励型の文学がすべて無効になってしまった状況の中で、人間の欲望というものを否定せずに正面から見据えたバルザックが、どんな文学よりも有効性をもっているのだと声を大にして叫びたかったからなのです」と述べている。

実際、バルザックの『人間喜劇』は欲望と虚栄、嫉妬と愛欲をむき出しにした実に人間的な人々を描きながら、19世前半のフランス社会経済風俗を見事に描き出した万華鏡のような作品集である。しかし、バルザックは単に、様々な人物の面白いエピソードを集めただけの小説を書いたわけではない。そこでは主要な人物を別々の作品に相互に登場させて、『人間喜劇』全体に厚みを持たせたり、広く現実の生活から観察されたいくつもの歴史的事件やエピソードに基づいて、ひとつの大きな小説空間を作り出すという手法を用いることで、フランス社会を立体的に描くことに成功しているのである。

本書の最大の魅力は、小説に登場する人物である。貴族社会の片隅で高利貸しを営みながら、社会と人間に関して鋭い観察眼をもったゴプセックは、バルザックの表現を借りれば、「焼きの入った、見事に鍛え上げられた魂」の持ち主である。このゴプセックは財力によって人間の運命を支配し、世界を所有できることを確信している旧世代に属する人物として描かれている。いま一人の魅力的な人物は、『骨董室』に登場するデグリニョン家の奉公人シェネルである。バルザックは彼を次のように描写している。「シェネルは、私生活なるものを知らぬ、偉人のひとりであったばかりか、ひとつの偉大なる事象でもあったのだ…。シェネルの美徳とは、本質的に、貧困なる民衆と、栄華ある特権階級とのあいだの階級に所属するものなのである。この中間的な階級とは、ブルジョワのつましい徳と、貴族の崇高な思想とを兼ね備えることで、後者の考え方を、実質的な教育の光によって啓蒙することができるのである。」

バルザックはこの奉公人シェネルを自己の分身、あるいは自己の理想像として描いているようである。すなわち、新興ブルジョワジーの時代の到来という現実を直視しつつも、自らが属する伝統的な価値の保持という大義名分にも肩入れしながら名誉を抱いたまま死んでいく人物である。

これらの小説は様々な読み方が可能である。最も標準的な読み方は、フランス革命

による共和制の誕生からナポレオンの帝政、王政復古、共和制復活、帝政復古までの社会的な大変動の時代（19世紀前半）における、貴族階級から新興ブルジョワジーへの勢力の移行劇として読むことであろう。

もうすこし専門的に読むこともできる。例えば、本書に登場する、宝石などの買戻し条件付売却取引きは、現代ファイナンスでレポ取引きとして重用されているものの原型であるし、出張セールスマン、ゴディサールの売らんとする生命資産保険は人的資本理論に基づいた信用貸付の一種である。偽装倒産を繰り返して大きくなっていくニュシンゲン銀行の戦略は市場規制の入らない、いわば完全自己責任の時代におけるリスク転嫁の成功例と見ることが出来る。

わが国は大きな変革期にあり、旧勢力が新興勢力に取って代わられようとしていることは疑いのない事実である。新聞紙上ではゴプセックやニュシンゲンに相当する人物の話にいとまがない。いま、バルザックを読む意義はことのほか大きいのである。